

日本人と『西遊記』

阮 毅

要旨

周知のように、『西遊記』は「四大奇書」の一つである。江戸時代に、『西遊記』は日本に伝来し、以来日本人に親しまれてきた。

『西遊記』は荒唐無稽なだけの作品と思われがちだが、実は極めて論理的な全体構造をもっている。それがゆえに、江戸時代以来、歴代の日本人がそれを翻訳し、研究し、解明に努めてきた。この小論は「四大奇書」のほかの三書と異なる『西遊記』を日本に受け入れた当時の事情から着眼し、論じていく。そして今日まで日本の作者がいかに『西遊記』に影響されてきたかを尾崎紅葉、芥川龍之介、中島敦などの作品を通じて考察する。最後に、できるかぎ

り日本人における『西遊記』研究の全体像を明らかにするものである。

キーワード…日本人 『西遊記』、創作、研究、影響

はじめに

昔から、「四大奇書」(『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』)は他に類を見ない面白さで、日本人に親しまれてきた。

その中でも、『西遊記』は魔物や妖怪が乱れ飛ぶような現実ばなれた内容であるにもかかわらず、文章は読みやすく、その上、物語の構成も非常にわかりやすい。このような『西遊記』が日本人にいかに受け入れられ、そしてい

かにその影響を受けてきたのかを考察するのがこの小論の目的である。

一 混沌たる期

「四大奇書」の中、「水滸伝」は、十七世紀の初めごろには、もう渡来し始めていた。「金瓶梅」は、十七世紀の前半には早くも日本に入ってきたと考えられる。そして、日本で「三国志演義」が翻訳されたのは、元禄二年（一六八九）から三年間にわたつてのことである。それらはいたい原書、和刻、翻訳、翻案という四つの段階を経て日本に定着したものであり、その過程はいずれも順調であった。「西遊記」のみは紆余曲折があった。

鳥居久靖氏の研究によれば、日本に伝来した『西遊記』のテキストは康熙丙子（三十五年＝西暦一六九六）初刻の『西遊真詮』であった。¹⁾江戸期には、抄訳として『通俗西遊記』と『絵本西遊全伝』があった。前者は宝暦八年（一七五八）初編の刊行に始まり、七十四年の歳月を費やして、ようやく天保二年（一八三一）、計五編三十巻完成。後者は文化三年（一八〇六）に初編刊行、約三十年の光陰を費やしている。天保八年（一八三七）、四十巻完成。明治期になると、『絵本西遊記』は日本に於ける西遊記の代表的

地位を獲得した。

周知のように、幸田露伴は『水滸伝』研究の白眉であり、当時としては中国・日本を通じて最高レベルの『国訳忠義水滸全書』のような業績を挙げているが、『西遊記』について、とまどうことがあつたようである。彼は『西遊記』の作者について、前後に「西遊記の著者」、「西遊記の作者」「西遊記作者」とずいぶん苦勞してその見解を発表しているが、どうも焦点をあわせることができなかったようだ。「西遊記の著者」の中で、彼は

然るに世多くは西遊記の作者を道士邱翁なりとして信じて疑はず、予もまた一昨年までは之を信じ居たりき。²⁾

とその作者を、邱処機³⁾だと思ひ込んでいることを率直に認めた。さらに

予まだ邱翁著はずところの西遊記を得て之を讀まずといへども、他書に引くところによつて考ふるに、蓋し處機の作るころのものは決して悟空悟浄三蔵八戒の談を載せたる小説の西遊記にあらずして、元の時の目撃耳聞を載せたる記實の書のみ。邱翁の西遊記を作

らざるにはあらず

と、その理由を説明している。

「西遊記の作者」中において、「然れども俗書西遊記、其作者の不明なるを以て、文字有る者も、由つて出づるところを疑ふこと久し。」⁽⁴⁾ というのを指摘し、「長春（長春真人のこと）の北徼を過ぎて西域に至るや、行程萬餘里、弟子其の経歴するところを記す、これを西遊記といふ。」⁽⁵⁾ という認識を持つていたわけである。

なお、孫悟空については、「西遊記の孫悟空は、慈恩傳に出でたる胡の石盤陀といへるものを種子として、作者の之に枝葉を生ぜしめしに疑ひ無く、緊箍呪の一話の如きは玄奘が夜観音を念ずるの一段より拈出し、ものなること疑ひ無し。さるにても作者の想像の巧なることよ。」⁽⁵⁾ と解説していた。

ちなみに、露伴のいう「慈恩傳」とは『大唐大慈恩寺三藏法師伝』のことであり、その弟子慧立の著である。幸田露伴は「作者の不明なる」「俗書西遊記」を低く評価し、自分なりの『西遊記』を書こうとも考え、『真西遊記』まで創作した。

幸田露伴の『真西遊記』は「発端」「其一」から「其十二」より構成されているが、内容からは『大唐西域記』に基づ

いていることが理解される。作品の中に、「玄奘はまづ名家ともいふべき家の系に生れ出しなり」と説明し、インドまでの過程を詳しく紹介している。但し、『西遊記』について次のように評している。

されど西遊記といへる書は全く絶えて無きことのみを作り設けしものにはあらず、彼博望侯張騫をさへいとことごとしく載するほどの支那の歴史の中に於て珍らしくもまた極めて大なることのありしを骨となし、妖怪變化の妄譚を皮肉となして作りしものなれば、其書の漸く廣まるに従ひて其捏造の假話のため眞實に存せしことまでも信用し難き 譚の中に埋もれたる觀あれど、元來稀有の大架空談の根據とせしほどのことゆゑ其事實は眞に稀有の奇事快事にして、ただに快奇の事なるのみか又其を聞かば惰夫も立つべく貪夫も慚ぶべく年少き諸君は取つて學ぶべきいと目ざましき事實なれども、古來學者の此事を云はざるものは、其事皆釋氏の道に屬せるため、公平ならざる支那の歴史家等の毫も稱揚せざりしに本づけりとも云ひつべし。⁽⁶⁾ (傍線筆者)

右の文より、当時幸田露伴の『西遊記』に対する認識は

「捏造の假話」にとどまっていたことがうかがえる。また、明治期の「年少き諸君」にとつて無意義であるから、『真西遊記』を創作したことを強調している。日本における「四大奇書」受容の過程をみると、ほかの三書はこういった「本物」「贋物」の問題はなかった。なぜ『西遊記』のみかという点、その平易かつ普遍的なるタイトルにあるのではないだろうか。その例として、日本にも京都の医者橋南翁が九州・四国や信越・奥州を旅行して、『西遊記』『東遊記』を刊行したことがあげられる。要するに、明治期の幸田露伴の文名と文壇における地位によつて、日本人の『西遊記』に対する認識が左右されなくもなれないと思われるが、日本における中国古典文学受容史を回顧する上においても、誠に貴重な一頁であると言ふことができよう。

二 創作応用期

日本文学における中国古典文学の影響が極めて大きいことは周知の事実である。それについて、国木田独歩は「竹取物語は、わが國の物語中尤も秀でたるものなり。日本文学の精華として長く後代に傳ふべきものならん。唯惜むらくは、彼の構想或は支那の物語などに胚胎せしならんか⁽⁸⁾を。」と、大変典型的な例を挙げている。麻生磯次氏も「尚

細かに見れば、孰れの作品にしても、支那文學と全然交渉をもたぬ作はないといつてよい」とその比較文學的研究の感想を述べている。

「四大奇書」に限つて見ても、江戸時代に上田秋声の『雨月物語』の第八話「青頭巾」は、『水滸伝』第五回から第六回にかけての筋と措辞を踏まえていることは、早くから指摘されている。そして、曲亭馬琴が『水滸伝』をもとにして、『南総里見八犬伝』を書き、『金瓶梅』をもとにして、『新編金瓶梅』を書き、『西遊記』を翻案して、『金毘羅船利生纜』^{りしょうのともづな}にすることはよく知られている。

それ以来、うまく「四大奇書」を換骨脱胎してその構成や筋の中にとりいれるような、「部分的に似たところがある」というような作品は、数えきれないほどある。最近、浮世草子『新鑑草』の中に『水滸伝』の英雄たちが登場するような研究まで進み、多くの謎が明かされている。しかし、『西遊記』のみはあまり注意されていなく、比較文學的な見地からそれほど研究されていなかった。

『西遊記』は日本の庶民に愛読されるのみならず、日本の多くの作家も『西遊記』を愛読する。例えば、内田魯庵の『社会百面相』に『西遊記』に関する会話が⁽¹⁾あり、永井荷風も『西遊記』を愛読した。と同時に、『西遊記』は作品創作の材源として、日本の多くの作家に活用されている

と思われるが、次は尾崎紅葉、芥川龍之介、中島敦三人の作品からその影響を見てみたい。

(ア) 尾崎紅葉による創作活用

紅葉は十四歳の時に、漢学者岡千仞の塾・綏猷堂すいごどうに漢学を学び、のち石川鴻斎の門に転じた。略伝にも見えていたように、紅葉は七歳から十五歳まで、漢学教育を受けている。このような並外れた漢学素養をもつ紅葉であるが、文学作品を創作するにあたって、中国の古典文学作品に素材を求めることは、ごく自然なことであった。だが、いままで紅葉の作品と『西遊記』とのかかわりを指摘した論考は見られない。

「鬼桃太郎」は尾崎紅葉の作品であり、明治二十四年（一八九一）十月十一日、『幼年文学』第一号に発表したものである。その冒頭に

むかしむかし翁は山へ柴刈に、媼は洗濯の河にて、拾ひし桃実の裏より生れ出でたる桃太郎、猿雉子犬を引率してこの鬼ヶ島に攻来り、累世の珍宝を分捕なし、勝矜しやうきんらせて還せし事¹³

と、すべての日本人の知っているお伽話「桃太郎」の冒頭を紹介し、そして、一転して

この島末代までの耻辱なり、あれは願はくは武勇勝れたる鬼のあれかし其力を藉てなりともこの遺恨齎さばやと、時の王鬼島中に触を下し、誰にてもあれ日本を征伐し、桃太郎奴が若衆首と、分捕られたる珍宝を携へ還らむものは、此島の王となすべし

略奪された「累世の珍宝」を奪還するために、「鬼ヶ島」の「王鬼」より触れ（布令）を下すことになる。つまり、島の恨みを晴らすために、「日本を征伐し」桃太郎を捕まえようという物語になっている。そして、

妾夜叉神に一命を捧げて、桃太郎二倍なる武勇の子を禱るべしと、阿修羅河の岸なる夜叉神社に参籠し、三七日の夜にして始めて霊夢を蒙り、その払暁水際に立出で、見れば、いと大きな苦桃一顆浮波々と浮来りぬ、扱はと嬉しく抱還れば、待構へたる夫の喜悅たとふる方なし、

割きて見れば果せるかな、核おのづから飛で坐上に躍ると見えしが、忽焉其長一丈五尺の青鬼と変じ、紅皿

のごとき口を開き、爛々たる火焰を吐て轟と立たる其風情、鬼の眼にさへ恐ろしくも、また物凄くぞ見えたりける、苦桃の裏より生まれたればとて苦桃太郎と名乗らせぬ、

と「鬼桃太郎」を登場させているが、具体的な描写は『西遊記』に力を借りているようである。

その王鬼から

八角に削成して二百八十八箇の銀星打たる鉄棒を賜ひ、爾之を以て桃奴が腰骨微塵に砕けよとありければ、苦桃太郎冷笑ひ、桃太郎風情の小童十人二十人、虱を拵るよりなほ易きに、安ぞ武器などの入り候べき、仮初にもかゝる物を賜ふ事頗る某が武勇を氣遣ひたまふに似たり、無礼は御免し候へ、これ御覽せよ方々と、側なる鉄の円柱を小指もてゆらゆらと盪揺かせば、満座齊しく色を失ひ、やれ苦桃枝搦は見えたり、止めよ止めよと震慄きけり（傍線筆者、以下も同様）

以上の引用部分は、『西遊記』中の主人公孫悟空が、東海の龍王を訪ねて伸縮自在の如意金箍棒を入手する過程、第三回「四海千山皆拱伏／九幽十類盡除名」の一場面と

きわめて類似している。

龍宮の中で、龍王に案内され、「一塊の神鉄」である「如意金箍棒重さ一万三千五百斤」を手にとり、

悟空は心中ひそかに喜びながらうなずいた。かれは歩きながら、また手でゆさぶつて言った。

「もちよつと短くほそくなれば、いっそう結構なんだが」

と、鉄棒は、長さ一丈二尺ばかり、太さはお碗ほどになつている。かれは神通力を發揮して、棒の型をやりながら水晶宮へ舞いもどつて来た。老竜王は驚いてふるえあがり、小竜王は魂をけし飛ばせ、亀・鼈・鼉どもは首をちぢめ、魚・蝦・蟹・蟹どもはことごとく頭をかくしてしまつた。⁽¹⁴⁾

ただ、「鬼桃太郎」中において、「如意金箍棒」は「八角に削成して二百八十八箇の銀星打たる鉄棒」になつている。なお、作中具体的な戦う場面で、次のような描写がある。

凡俗なる狐狸の輩を友とせむや、まづ召寄せて見参に入れむと、二振三振尾を掉れば響宛然金鈴のご

とし、之を合図に北方より忽然として白毛朱面の大
 狒飛来り、西方よりは牛かと思ふばかりの狼躍出
 でて、一斉に太郎が前に額けば、苦桃岩角に腰打懸
 け、鳩の羽扇にて魔ねき、実に頼もしき器量骨格、
 狒は猿の首領にして狼は犬の強敵たり、之に加ふる
 に毒龍あれば、桃太郎を一戦に撃破らむ事、鉄槌を
 以て土器を摧くがごとし、いざ引出物取らせむと、
 また二箇の鬪鏝を与へ、いでや出陣と立上れば、毒
 龍再び策を献じていはく、某に飛行自在の術の候、
 瞬時にして日本国に到るべしと、虚空に向つて呼吸
 を吐けば、不思議や黄雲遽然蒸して眼前に聚りぬ、
 主従之に打乗り、宙を飛ぶごとし西遊記の絵のごと
 く、一昼夜にして眼界果しなき大洋の上にぞ来りけ
 る。

苦桃太郎不審を起し、我等神通力を以てかく飛行し
 ながら、未だ日本の地に着かざる理なし、毒龍爰は
 鬼ヶ島を去ること若干里ぞ、さん候、大約十二万三
 千四百五十六億七千八百九十里、おつと其は行過ぎ
 たり、戻せ戻せと逆飛雲の法を行なはせて、無二無
 三に退るほどに還るほどに、また戻過ること九十
 八万七千六百五十四億三万二千と一百里、……

「鬼桃太郎」は「桃太郎」と比べた場合、最も大きな違
 いは「西遊記」の要素を持つことであろう。すなわち、「鬼
 桃太郎」にある上述の描写と「飛行自在の術」である。そ
 の「大約十二万三千四百五十六億七千八百九十里」飛ぶこ
 とができ、「逆飛雲の法」を行うなどは尾崎紅葉自身が作
 り出したものとは思えない。十万里という長距離を飛ぶと
 は、破天荒な発想だが、『西遊記』中の独創である。それで、
 いうまでもなく『西遊記』中の孫悟空の筋斗雲の術（雲に
 乗ればひとつ飛びで十万里行ける）に由来しているも
 のであるとしか考えられない。

ちなみに、『紅葉全集』を通読しても、『西遊記』の版本
 に言及した作品・随筆などは見当たらない。彼は「書目十種」
 を書き残しているが、愛読書十種しか書いていない。しか
 し、「鬼桃太郎」中で「宙を飛ぶごとし西遊記の絵のごとく」
 と描き、「絵のごとく」という表現があるから、前掲の『絵
 本西遊記』を愛読したことは確実であろう。管見によれば
 日本近代文学者の中において、最初に『西遊記』を文学創
 作の素材として生かしたのは彼であった。

(イ) 芥川龍之介による創作活用

芥川龍之介は幼年期から旺盛に中国古典文学作品を讀

み、特に「四大奇書」を読みあさり、中国古典文学的素地を耕した。

彼は「愛読書の印象」の中に、子供の時の愛読書として『西遊記』を第一に、次に『水滸伝』をあげているが、具体的には、いかに『西遊記』に影響されているかを分析してみよう。

芥川の作品と『西遊記』とのかわりが多く見られるが、筆者以外にその指摘は見られない。左はまず「杜子春」に絞っておこう。

「杜子春」（大正九年七月）「四」より引用しよう。

と、どこから登つて来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざはざは揺れたと思ふと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つておりました。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺ふのか、暫くは睨合ひの体ていでしたが、やがてどちらが先

ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬まく内に、なくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。（傍点筆者、以下も同様¹⁵）

地獄に移行する直前の描写である。杜子春は虎と大蛇に襲われる。芥川の創作と思われがちであるが、『西遊記』の第十三回「陷虎穴金星解厄／雙岫嶺伯欽留僧」、すなわち『絵本西遊記』¹⁶初編卷五の同箇所を見ると、やはりそれを踏まえたものと考えざるをえない。

あら、おそろし、前面より二疋の大虎警来たり、吼るほこゑ雷の如し、後の方よりは數十丈の大蛇、口をひらき焰を吹いて追来る。三藏氣も魂も身に添ず、今や命をとらるると見る處に、不思議や虎も大蛇も、あはておどろ慌きたるありさまにて、谷の蔭へ、一參に逃げ入たり。

虎と大蛇の出現だけではない。その消失の様相も類似している。このほかにも、重要な類似点がある。「杜子春」の「三」にそれが見うけられる。

鉄冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口中に呪文を唱へながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るやうに跨りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち龍のやうに、勢よく大空へ舞ひ上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆をつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、(とうに霞に紛れたのでせう)どこを探しても見当たりません。

これにきわめて似た情景を、『西遊記』に見いだすことができる。孫悟空が朱紫国の金聖皇后を救い、その本国へ送る第七十一回「行者仮名降怪狐—観音現像伏妖王—」、すなわち『絵本西遊記』三編卷八の同箇所に次のようにある。

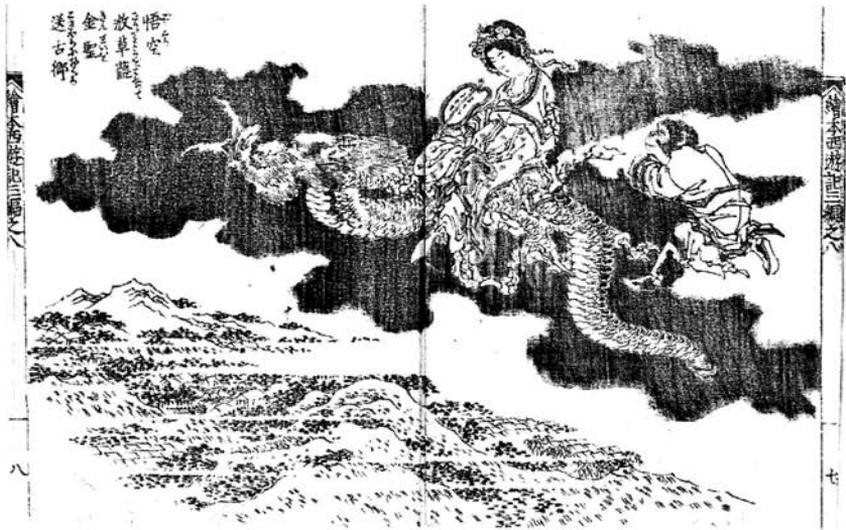
行者頓て草を束・龍の形を作り、是に皇后を跨上しめ、娘々怖るる事なかれ、堅く眼を塞ぎて、管ず開給ふべからず。我暫時に本国へ送り進すべしと、神通を以て彼草龍空中を走しむる。皇后は眼を塞ぎて、唯耳

に風の音を聞くのみにて、まだ半時ならざるに、忽ち朱紫國の宮中に立歸り、行者雲を排きて殿上に下り、皇后眼を開き給へと呼びける。此聲を聞いて、金聖兩眼を開き見給へば、思ひきや我本國の宮中なりければ、歎喜給ふ事限りなし。

先に引いた「杜子春」と読み比べれば、その構図は同一といえる。傍点の部分が示すように、鉄冠子が青竹を竜に変化させるのと同様、孫悟空も草で「龍の形を作り」草竜とする。さらに、空を飛行して遠隔地に送り届けるという筋も共通している。『絵本西遊記』の同箇所に、金聖皇后が草竜に乗り、孫悟空がそのそばを飛んでいる鮮明で印象に残りやすい絵がある。(三十八頁の図を参照)。芥川はこの絵を記憶し、草竜から竹の竜へと変換して、「杜子春」の一節を書きあげたものと思われる。

「杜子春」のほかに、「きりしとほろ上人伝」中にも、その影響がみられる。まず、「きりしとほろ上人伝」に於ける流沙河の描写を次に引用しておきたい。

ここを南に去ること一里がほどに、流沙河と申す大河がおぢやる。この河は水嵩も多く、流れも矢を射る如くぢやによつて、日頃から人馬の渡りに難儀致



(日本近代文学館芥川龍之介文庫所蔵『繪本西遊記』より)

すとか承つた。(三)⁽¹⁸⁾

「きりしとほろ」は隠者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに参つたれば、まことに濁流滾々として、岸べの青蘆を戦がせながら、百里の波を翻すありさまは、容易く舟さへ通ふまじい(四)

「きりしとほろ上人伝」に於ける流沙河の描写は、非常に独特で、印象に残りやすいものである。対して、種本となる『黄金伝説』の中に、こうした流沙河に関する描写があるかどうかを確認しなければならぬ。『黄金伝説』(九五、聖クリストポルス)の同箇所は、次のようになってゐる。

そこで、隠修士は言った。「ご存じですか。むこう岸へ渡ろうとして多くの人たちが命を落とす川があるのですが……」クリストポルスは「ええ、その川のことなら知っております」と答えた。隠修士は言った。「あなたは、背も高いし、力もおありだ。あの川のほとりで待っていて、人びとを渡してあげなさい。そうすれば、あなたがお仕えしたいというクリストさまの思召しにかないます。そして、クリストさまは、きつとあの川のほとりであなたに姿をあらわしてください

とおもいますよ」クリストボルスは答えた。「それなら、わたしに打ってつけの仕事ですから、川守りとしてキリストさまにお仕えすることにしましょう」こうして彼は、その川のほとりに行き、岸辺に小さな小屋をひとつ建てた。棹のかわりに太い杖をもち、それで身をささえて流れに入り、人びとをかついでつきつぎにむこう岸へ渡してやった。⁽¹⁹⁾

芥川の「きりしとほろ上人伝」中の「きりしとほろ」は、原典の中では「クリストボルス」と言うが、右に明らかなように、『黄金伝説』の該当箇所は、「きりしとほろ上人伝」中の描写と極めて類似している。しかし、上述の流沙河に関する描写は全く見受けられない。「あの川」「その川」としてあるだけである。この九十五章「聖クリストボルス」のみならず、『黄金伝説』の一章から最後の一七六章まで通観して見ても、同様である。

「きりしとほろ上人伝」に於ける流沙河の描写は、『西遊記』によつたものとしか考えられない。『西遊記』第二十二回、「八戒大戦流沙河」／木叉奉法取悟浄」すなわち『絵本西遊記』初編巻八の同箇所を見てみよう。

道を急ぎ給ふに、忽ち前面に一條の大河あり、大波湧

かへりて、河の廣さ其幾千といふ限を知らず岸に上りて望み見る時、傍らに一ツの石碑あり、上に流沙河の三字を篆字にて彫付け、(中略)三蔵是を見て、さては聞及びたる流沙河なり、何さま此河を渡らん事容易事にあらずと、河岸に立て眺め給ふに、忽ち河浪山の如く巻上り。

単に「流沙河」のイメージ⁽²⁰⁾のみならず、傍点の部分を対照すれば、具体的に共通する部分がかなり認められる。また、従来の芥川の手法から考えれば、「きりしとほろ上人伝」の「流沙河」を創作するに当たり、この場面のみならず、『西遊記』にあるほかの川をも参考にしたのではないかと思われる。

『西遊記』に自然の川は全部で三本ある。それぞれ、第二十二回の流沙河、第四十三回の黒河、第四十七回の通天河である。その第四十三回「黒河妖孽擒僧去」西洋龍子捉鼉回」、すなわち『絵本西遊記』二編巻五に黒河に関して、「然るに、一流の大河に行かかると、其水黒くして、水勢箭を射るが如し」と描かれている。又、その第四十七回「聖僧夜阻通天水」／金木垂慈救小童」すなわち、『絵本西遊記』二編巻七の同箇所に、通天河の描写がなされており、

観に洋々として、月の光を浸し、浩々として、影天に浮ぶ、靈波は花岳を吞、長流百川を貫き、千層の河浪は、滾上りて、萬疊となり、(中略)四方渺茫として海のごとく、一望さらに邊際なし。

とその壮観な様が描かれている。このように、芥川は『西遊記』の流沙河の描写をもとにし、「黒河」「通天河」の描写をも参照して、原典『黄金伝説』にある「あの川」を具体化し、「きりしとほろ上人伝」にみえるあの独特な流沙河を描いたものと推察される。⁽²¹⁾

以上のほか、芥川龍之介の小品「女体」(大正六年)の蚤に化して女体を見るところという発想は『西遊記』の悟空が如来の掌中から出られなかった話にヒントを得ている。「桃太郎」(大正十三年)の「美しい赤児」を孕んだ木は『絵本西遊記』の人参果に拠ったものである。「仙人」(昭和二年)の瓢箪舟や、「遊行柳の根っこ」は『西遊記』(『絵本西遊記』)初編巻八に拠っている。なお、「羅生門」(大正四年)の末尾の「黒洞々たる」という表現は中国語であり、『西遊真詮』第六十五回などに同種の表現が見出せる。⁽²³⁾

(ウ) 中島敦による創作活用

中島敦の『わが西遊記』(「悟浄出世」「悟浄歎異」の総題)は、昭和十七年十一月刊の第二作品集『南島譚』によって、初めて世に出た作品である。

「悟浄出世」と「悟浄歎異」は連作であり、登場人物も内容も連続している。両作品のあらずじを簡潔にまとめれば、左のようになろう。

悟浄は心の病に耐えられず、旅に出る。そこでは他者の幸福を羨みつつ、世界の意味を尋ねるが得られない。やがて、彼は自己の可能性を試してみようと決意する。その結果、観音菩薩に救われ、三蔵法師の一行に加わり、「みごとでない」脱皮をする(「悟浄出世」)。しかし、その天竺行では「薄氷を覆むやうな思い」に脅かされ、行動者の悟空を賛美して、彼に近づこうと努める。が、省みて自分は行動者にはなれず、傍観者にとどまるのではないかと懷疑する。そこで、彼は悟空への道を身をもって「学ぼう」と決意する。その後、三蔵法師の「愛」を悟り、「ほの温かさ」を感じる(「悟浄歎異」)。

「悟浄出世」の冒頭に『西遊記』第二十三回「八戒大戰流沙河 木叉奉法取悟浄」中の挿入詩「八百流沙河 三千弱水深 鷺毛飄不起 蘆花定底沈」をそのまま引用しており、背景(流沙河)も、人物(悟浄・孫悟空・猪悟能・三蔵法師・観音菩薩)も『西遊記』のままであるから、比較

文学の見地から『わが西遊記』を研究するのはあまり意味がないかもしれない。しかし、次の二点については注目しなければならない。

その一、中島敦は『西遊記』を深く読み込んでいた。

三蔵法師の従者の三名に対して、攻撃精神の塊の孫悟空、享樂的でいい加減な猪悟能、ニヒルで醒めた沙悟浄と、それぞれまったく異なるイメージを見事に評している。

その二、中島敦は『西遊記』を高く評価している。

「とにかく、僕はそんな積りでもつて、西遊記（孫悟空や八戒の出てくる）を書いてゐます。僕のファウストにする意氣込みなり。どうして支那、日本の文學者は此の材料に目をつけなかつたのかな？」⁽²⁴⁾

特に、指摘しておかなければならないのは、中島敦による三蔵法師の従者の三名の評価はその後の『西遊記』登場人物研究の方向づけとなった。

そのほか、田中英光『わが西遊記』（一九四四年）などの存在も注目すべきである。

三 深甚たる研究期

一九四九年から弓館小鱈訳『西遊記』、安藤更生、小杉一雄共訳『西遊記』などは世に送るようになったが、い

れも全訳ではなかった。ほかに、『西遊記』と銘打つ書物の刊行も、おびただしい数にのぼっている。

その中、太田辰夫・鳥居久靖両氏の労訳『西遊記』が一九七一年に平凡社から刊行された。それは『通俗西遊記』から実に二百年を経ての全訳であり、『西遊記』の翻訳・研究がひとつの高いレベルに達したことを示している。二十世紀八十年代に入ると、『西遊記』の研究が盛んになり、綿密な考証などが行われた。『西遊記』研究者も雨後の竹の子のように、たくさん出てきた。中野美代子、太田辰夫・中鉢雅量・磯部彰・西孝二郎・入谷仙介らが、代表的な『西遊記』研究者である。

研究論文のほうは中鉢雅量氏の「西遊記の成立」⁽²⁵⁾があり、研究の専著としては中野美代子氏の『孫悟空の誕生——サルの民話学と「西遊記」』及び『西遊記の秘密——タオと煉丹術のシンボリズム』、太田辰夫氏の『西遊記の研究』などがある。これらによって、『西遊記』の研究は一段と推し進められた。その中、一九八〇年、中野美代子氏は『孫悟空の誕生——サルの民話学と「西遊記」』の中で、初めて孫悟空が誕生したのは福建省であるという観点を打ち出した。それは学術研究成果として中国に逆輸入され、話題となった。ちなみに、中野美代子氏の研究成果は中国でも高く評価されていた。ついで、孫悟空出身地探し「プー

ムとなり、「江蘇省説」「福建省説」「甘肅省説」「山東省説」「河南省説」「山西省説」などまで出て来た。まさに文化伝播と国際学術交流の典型であらう。

同九十年代になると、『西遊記』の研究がブームとなり、五行、易経、煉丹術などの各角度からの『西遊記』に対する研究において、長年の努力が実った。中野美代子氏の『孫悟空はサルかな?』、磯部彰氏の『西遊記』形成史の研究、磯部彰氏の『西遊記』受容史の研究、西孝二郎氏の『西遊記』の構造、入谷仙介氏の『西遊記』の神話学——孫悟空の謎』などが続々と世に送り出された。これらは以上の研究者によって積み重ねられた専門的業績であるが、二十世紀九十年代は日本における『西遊記』研究の集大成的時代だと言えよう。

二〇〇〇年、中野美代子氏は先学の研究成果を踏まえながら、『西遊記』トリック・ワールド探訪——という書を出版しているが、特に注目したいのはその後の、小野忍・中野美代子訳『西遊記』であった。それは一九七七年に刊行が始まり、二十年余りで完結した。訳者は当初の小野忍氏の急逝により、第四巻から中野美代子氏が引き継いだ。周知の如く、中国語から日本語に翻訳する場合、最も難しいのは言うまでもなく、中国古典の漢詩、古詞、俚語などである。しかし、この『西遊記』は何よりも訳文がこなれ

ている。中野美代子氏は『西遊記』中に登場する漢詩を、ときに散文詩風に、ときに小唄風に、そしてときに旧来通り漢詩の読み下し文風にと、それぞれ考案して訳出している。例えば、『西遊記』第一回の冒頭に七言律詩がある。その最後の二句は左の通りである。

欲知造化會元功 須看西遊釈厄傳

太田辰夫・鳥居久靖両氏の『西遊記』は「造化会元の功を知らんと欲せば、須らく看よ西遊釈厄伝」と訳出している。率直に言えば、少々生硬で、今の若者が読むには理解しにくい。これに対して、中野美代子の『西遊記』は「創造の秘密を知りたいのなら、この『西遊記』を読みたまえ」となっている。

翻訳という作業は卓抜した研究能力と長い歳月が必要である。総じて言えば、二〇〇五年改版した岩波書店版『西遊記』（中野美代子訳・全十冊）の刊行によって、日本における『西遊記』翻訳・研究が最高のレベルに達したというべきであろう。それは歴代の日本人による努力の結晶ともいえよう。

おわりに

以上、日本人と『西遊記』について、力不足を顧みずそのまともを試みた。

『西遊記』の作者及び作品における混沌たる期から今日のような優れた研究成果を収めた日本人の『西遊記』研究過程に対し、感無量せざるを得ない思いである。

芥川龍之介は「文芸的な、余りに文芸的な」の中において、彼は、「僕はこの「構成する力」の上では我々日本人は支那人よりも劣つてゐると思つてゐない。が、「水滸伝」「西遊記」「金瓶梅」「紅樓夢」「品花宝鑑」等の長篇を絮々綿々と書き上げる肉体的力量には劣つてゐると思つてゐる。」⁽²⁹⁾と述べ、中国古典文学作品を極めて高く評価している。

『西遊記』のような中国古典文学作品は芥川の言つてゐるように「絮々綿々と書き上げ」ているが、この「絮々綿々」の中に中島敦の言うような材源があり、無限の魅力がある。『西遊記』は百章からなっているが、実は四十一の独立した物語で構成されている。張錦池氏の言を借りれば、『西遊記』は言語的には浅いが、趣旨的には深い文学大著である。その浅さは、子供でも充分鑑賞できるが、そ

の深さは、専門家でさえもその趣きを知ることが容易ではないと感じるほどである。⁽³⁰⁾それゆえ、『西遊記』は歴代の日本人に愛読され、頻繁に日本の作家に活用されてきたのではないかと思う。

(この小論の骨子は二〇一一年八月三日中国陝西師範大学が主催する『中日韓・言語・文化国際シンポジウム』で口頭発表済みのものであり、今回はその要旨を元に新たに書き上げたものである。)

注

- (1) 「わが国に於ける西遊記の流行―書誌的に見たる」(『天理大学学報』第十九輯 昭和三十年十二月)
- (2) 『露伴全集』(第二十九巻 岩波書店 昭和五十四年七月二八八頁)
- (3) 邱処機(一一四八―一二二七)字は通密、自ら長春子と号した。元の栖霞(今山東)の人。道教全真派の開祖で、チンギス汗に招かれて中央アジアのベルワンまでを往復した。その時の様子を記したのが『長春真人西遊記』と称せられる。
- (4) 『露伴全集』(第十九巻 岩波書店 昭和五十四年二月二五八頁)

なお、『西遊記作者』は『露伴全集』第四十巻にあるが、

その発表年代不明のため、省略する。

- (5) 『露伴全集』(第二十四巻 岩波書店 昭和五十三年十月一四八頁)
- (6) 『露伴全集』(第十一巻 岩波書店 昭和五十三年十月一六頁)
- (7) 中国では呉承恩『西遊記』、邱処機『長春真人西遊記』以外に、元の耶律楚材の撰で、チンギス汗の西征に加わって体験した史実や西アジア諸都市の有様を記した『西遊録』がある。日本では、『日本詩史』(二)に「中世称『叢林傑出』者。往往航海西遊」という描写があり、『隨筆・文会雜記』(付録・一)に「其後再西遊す。延享乙丑の春、吾藩を発して筑紫に趣く。」という記録がある。
- (8) 『定本 国木田独歩全集』(第九巻 学習研究社 平成七年七月 六十七頁)
- (9) 麻生磯次『江戸文学と支那文学』(三省堂 昭和二十一年二四二頁)
- (10) 徳田武「都の錦と中国小説——『新鑑草』の検討を通して出牢の時期に及ぶ」(『明治大学教養論集』二九七、一九九八) 広沢裕介「浮世草子に登場した『水滸伝』の英雄たち」(『アジア遊学』No.一〇五、二〇〇七)などを参照。
- (11) 『内田魯庵全集』(第十一巻 ゆまに書房 昭和六十一年八月 十七頁)
- 「社会百面相」に「君の戀愛小説なら、」とワン之助君は微笑しつゝ、「主人公が金瓶梅の武大郎、西遊記の猪八戒といふ處だナ。」という描写がある。
- (12) 永井荷風『断腸亭日乗』(第五巻 岩波書店 二〇〇二年一月 八十一頁)
- 昭和十五年十月初四の日記に「終日旧約聖書をよむ。唐女辨の西遊記をよむが如き興味あり。」という記録がある。
- (13) 『紅葉全集』(第二巻 岩波書店 一九九四年七月 四三三頁)
- (14) 太田辰夫 鳥居久靖訳『西遊記』(中国古典文学全集 第十三巻『西遊記』(上) 平凡社 昭和三十五年三月 二二頁)による。
- (15) 『芥川龍之介全集』(第六巻 岩波書店 一九九六年四月 二六三頁)
- (16) 前に引用した鳥居氏の調査によつて、芥川の愛読した『西遊記』が『絵本西遊記』であったことが推察される。ちなみに、日本近代文学館所蔵の芥川龍之介文庫に『西遊真詮』(巻一—二十、二十冊 陳士斌詮解 康熙三十五年序)、『絵本西遊記』初編十冊、二編十冊、三編十冊、四編十冊(文化三年—天保八年)が所蔵されている。
- (17) 詳しくは、拙稿「芥川龍之介と『西遊記』」(愛知大学国文学部 第三十七号 平成十年三月)を参照されたい。
- (18) 『芥川龍之介全集』(第四巻 岩波書店 一九九六年四月 二二五頁)
- (19) 前田敬作・西井 武訳『黄金伝説』(三) (人文書院 一九八九年七月 十五—十六頁)
- (20) 遠藤祐「奉教人の死」と『きりしとほろ上人伝』——物語の構造——(『海老井英次・宮坂寛編『作品論 芥川龍之介』所収 双文社 一九九〇年十二月)
- 遠藤祐氏は、論文に付した「注」の(注二十)に次のよ

うに説明している。

- (21) 小野忍訳『西遊記(一)』(岩波文庫、一九七七・一刊)。同書に南海の観世音菩薩と惠岸行者との「師弟ふたりが道を急いでいると、突然弱水が見えて来ました。つまり流沙河の地域です」(二二一ページ)とあり、その川の様子が「径過れば遙きこと八百里、上下すれば遠きこと千万里。水の流るること一に地の身を翻すが似く、浪の滾ること却って山の背を聳やかすが如し。」(二二二ページ)と記述されたあとに、妖魔の姿が描かれている。この妖魔こそやがて西天経を取りにゆく三蔵法師玄奘の第三の弟子となる沙悟浄にはかならない。『西遊記』のこの記述を読むと、「濁流滾々」として「百里の波を翻す」という「きりしとほろ上人伝」の「流沙河」のイメージは、『西遊記』のそれに基づくのではないかと、疑われる。

- (22) 詳しくは、拙稿「芥川龍之介「きりしとほろ上人伝」と『西遊記』」(『比較文学』第四十二巻 一九九九年度)を参照されたい。

(22) 芥川には「仙人」という同名の作品が三つある。一つは「新思潮」(大正五、八、一) 第一年第六号に発表された小説で、単行本には収録されなかった「仙人」である。(舞台は「北支那」、主人公は李小二) もう一つは、「サンデー毎日」(大正十一、四、二)に「オトギバナシ」の副題つきで発表された「仙人」である。(舞台は大阪の医者の家、主人公は奉公人) この二つは、いずれも中国古典文学に

材料をとった、いわゆる中国物である。ここで、とり上げたのは、上記の二作品ではない。『週刊朝日』(昭和二一、六)に掲載された「素描三題」の草稿とされており、雑誌「春泥」第五号(昭和五、七)に紹介された「仙人」である。

- (23) 詳しくは、拙稿「芥川龍之介の小品と『西遊記』」(『愛知論叢』第六十九号 平成十二年九月)を参照されたい。
- (24) 昭和十六年五月八日付 田中西二郎宛書簡(『中島敦全集』第二巻 三五八頁)
- (25) 中鉢雅量「西遊記の成立」(『中国文学報』第三十五冊 一九八三年十月)
- (26) 二〇一〇年六月二十一日中国『深せん商報』
- (27) 注14と同じ、三頁。
- (28) 中野美代子訳『西遊記』(第一冊) 岩波書店 二〇〇五年一月 九頁)
- (29) 『芥川龍之介全集』(第十五巻 岩波書店 一九九七年一月 一五二頁)
- (30) 張錦池『西遊記考論』(黒龍江教育出版社 一九九七年二月 二九四頁)
- 訳は筆者による。なお、原文は中国語で、左の通りである。『西遊記』は部詞浅而旨深の文学巨著。浅到一般小读者均能鉴赏、深得虽专家学者亦觉其大旨难识。

参考文献

- 『西遊記』(上・中・下) (人民文学出版社、一九七二年四月)
- 李卓吾評本『西遊記』(上・下) (上海古籍出版社、一九九四年)

十二月)

李志常述『長春真人西遊記』(商務印書館、一九三七年六月)

『芥川龍之介全集』(岩波書店、一九九五～一九九八)

磯部彰『西遊記』形成史の研究』(創文社、一九九三年二月)

入谷仙介『西遊記』の神話学』(中央公論社、一九九八年五

月)

太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四年六月)

『紅葉全集』(岩波書店、一九九三～一九九五)

『露伴全集』(岩波書店、一九七八～一九八〇)

永井荷風『断腸亭日乗』(岩波書店、二〇〇一～二〇〇二)

『中島敦全集』(文治堂書店、一九七〇～一九七二)

中野美代子『孫悟空の誕生——サルのみ話学と「西遊記」』(玉

川大学出版部、一九八〇年十月)

中野美代子『西遊記の秘密——タオと煉丹術のシンボリズム』(福

武書店、一九八四年十月)

中野美代子『孫悟空はサルかな?』(日本芸芸社、一九九二年

七月)

中野美代子『西遊記——トリック・ワールド探訪——』(岩波書店

二〇〇〇年四月)

西孝二郎『西遊記』の構造』(新風舎、一九九七年一月)

前田敬作・西井 武訳『黄金伝説』(人文書院、一九八九年七

月)

(RUAN YI 深圳大学副教授)